

【2022年1月19日】
送付件数 本票含め3枚

報道機関 各位

ワクチン接種意向を基礎づける心理的要因は何か？ －イスラエルと日本、ハンガリーの比較研究－

【研究の概要】

山口大学人文学部高橋征仁教授は、英国 Warwick 大学の Robin Goodwin 教授、イスラエル Ariel 大学の Menachem Ben-Ezra 教授らとともに、新型コロナウイルス感染症のワクチン接種意向に関して、イスラエルと日本、ハンガリーの3ヶ国の比較調査を実施し、その心理的要因を明らかにしました。

現在、新型コロナウイルス感染症の流行を抑制する方法として、世界中でワクチン接種が提唱されています。しかしながら、どの国でもワクチン接種に対して一定の忌避傾向が存在していることも事実です。そこで本研究では、ワクチン接種の先進国イスラエルと、ワクチン接種に出遅れていた日本・ハンガリーの3ヶ国を取り上げ、ワクチン接種の意向を基礎づけている心理的要因を探ることにしました。

それぞれの国の調査時点でのワクチン接種意向は、イスラエル 74%(2021年1月)、日本 51%(2021年2月)、ハンガリー 31%(2021年4月)でした。年齢や性別、学歴等を統制したうえで、これら3ヶ国で共通にみられたワクチン接種意向の心理的要因は、感染や重症化に対する不安ではなく、「政府に対する信頼」と「ワクチンを接種しなかった場合の後悔」でした。また、ワクチン接種をめぐる迷信は、それぞれの国で大きく異なり、日本で特徴的だったのは、「ワクチンを接種すると新型コロナに感染したことになる」という生ワクチンとmRNAワクチンを混同した迷信でした。これらの分析結果は、各国のワクチン接種キャンペーンのあり方を再検討するうえで非常に示唆に富んだものといえます。

この研究成果は、2021年5月25日から健康科学のための出版前サーバー *medRxiv* において公開されたのち、2022年1月10日に Nature 社のオープンアクセス誌 *Scientific Reports* に掲載されました。

【論文情報】

論文題目： Psychological factors underpinning vaccine willingness in Israel, Japan and Hungary
著者： Robin Goodwin, Menachem Ben-Ezra, Masahito Takahashi, Lan-Anh Nguyen Luu, Krisztina Borsfay, Mónika Kovács, Wai Kai Hou, Yaira Hamama-Raz & Yafit Levin
掲載誌： *Scientific Reports* (2022) 12:439
DOI: 10.1038/s41598-021-03986-2

【詳細な説明】

この研究では、新型コロナウイルス感染症のワクチン接種意向に関する心理的要因を明らかにするために、イスラエル(2021年1月、1011人)、日本(2021年2月、997人)、ハンガリー(2021年4月、1130人)の3ヶ国でウェブ調査を実施しました(日本分の調査研究は、「人を対象とする一般的な研究に関する審査委員会」2020-004-01 によって承認済)。それぞれの調査実施時点での1回目のワクチン接種状況は、イスラエル 22%、日本 0%、ハンガリー 28% でした。調査協力者におけるワクチン接種意向(接種者を除く)は、3ヶ国間で違いが大きく、イスラエル 74%、日本 51%、ハンガリー 31% でした。

ワクチン接種の意向に関しては、それぞれの国の歴史的・文化的背景やローカル集団の影響、個々人の心理的特性などによる違いがアドホックに指摘されているのが現状です。そこで本研究では、U.ブロンフェンブレンナーの生態学的システムモデルを用いて、①マイクロシステム＝意思決定における個人の認知(感染や重症化の知覚、ワクチン接種の利益と弊害の知覚、ワクチン接種しなかった場合の後悔)、②メゾシステム＝ローカル集団の影響力と規範(家族や友人など重要な他者からの影響力)、③マクロシステム

＝より広い社会からの影響力と規範(政府や保健当局への信頼、文化的迷信)の3層から、ワクチン接種の意向を体系的に説明することを試みました(図1)。

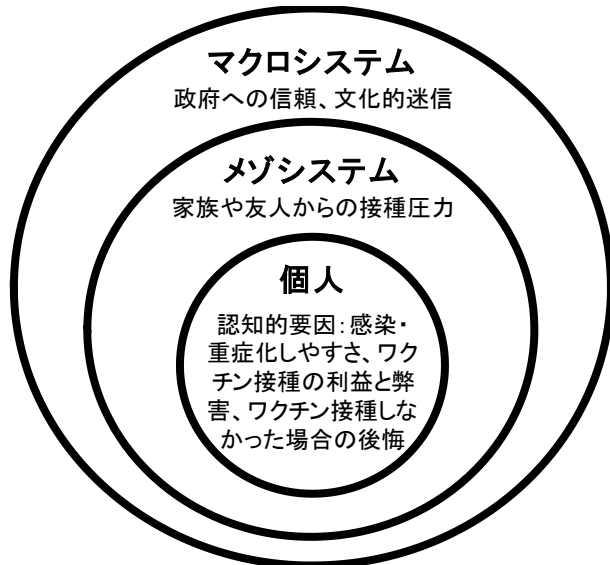


図1. ワクチン接種意向の要因に関する生態学的モデル (掲載論文の図1を高橋が翻訳)

この生態学的モデルを検討するにあたって、本研究では、層化多母集団のロジスティック回帰分析を行いました。表1は、その分析結果を示したものです。この表1によれば、ワクチン接種意向について3ヶ国で共通する要因としては、「ワクチン接種しなかった場合の後悔」と「政府への信頼」が挙げられることがわかりました。逆に、感染や重症化への不安を示す「感染しやすさの知覚」や「重症化しやすさの知覚」、感染経験や既往症リスクは、どの国でもワクチン接種意向と有意な関連が見られませんでした。このモデルによる分散の説明力は、イスラエル 44.2%、日本 47.9%、ハンガリー 39.2%でした。

表1. ワクチン接種意向に関する層化多母集団のロジスティック回帰分析の結果

	イスラエル (N=1,011)	日本 (N=917)	ハンガリー (N=1,130)
	β	β	β
性別 (1=男性)	.05 *	.02	.10 ***
年齢	.00	.00	.00
学歴 (1=大卒以上)	-.01	.06 *	-.02
健康状態自己評価 (4=大変良い)	-.04 *	.01	.01
既往症のリスク (1=あり)	-.01	-.03	-.03
コロナ感染経験 (1=あり)	-.03	-.04	.00
家族のコロナ感染経験(1=あり)	.00	.00	-.01
感染しやすさ知覚	.02	-.03	-.01
重症化しやすさの知覚	-.01	-.01	-.02
ワクチン接種の利益	.08 ***	.04	.08 ***
ワクチン接種の弊害	-.06 ***	-.23 ***	.00
ワクチン接種しなかった場合の後悔	.07 ***	.05 ***	.05 ***
主観的規範(家族や友人からの接種推奨、圧力など)	.03 **	.07 **	-.01
政府への信頼	.03 *	.08 ***	.13 ***
COVID19の迷信	-.33 ***	.00	.01

(掲載論文の表2を高橋が翻訳・簡略化) ***p < .001 **p < .01 *p < .05

日本に着目してみると、「学歴」や「主観的規範」が高いほどワクチン接種意向が高く、反対に、「ワクチン接種の弊害」（副反応による活動への影響懸念、ワクチン接種のわずらわしさ）が高いほど、ワクチン接種意向が低くなる傾向が見られました。また、「ワクチン接種の利益」や「COVID19の迷信」に関しては、全体として、明確な関連が見られませんでした。

また、「COVID19の迷信」として取り上げた10項目については、新型コロナやワクチン接種について、それぞれの国ごとに異なった誤解が存在していることが明らかになりました。イスラエルで特徴的であったのは、「ワクチンを接種するとDNAが変化してしまう」という迷信であり、ワクチン接種の意向とも大きく関連していました。対照的に、ハンガリーでは「ワクチン接種でアレルギー反応が起きる」とする意見が多く、ワクチン接種の忌避と関連していました。日本では、「ワクチンを接種すると新型コロナに感染したことになる」という誤解が比較的多く、ワクチン接種の忌避と関連していました。

今回の研究は、3ヶ国の一時点でのデータであるため、今後、様々な国で同じ変数がそのまま同じ影響力を持ち続けるのかはわからない部分も少なくありません。しかしながら、各国でのワクチン接種キャンペーンのあり方を再検討するうえで、以下のような点において非常に示唆に富んだものといえます。

- ①病気の恐怖に焦点を合わせた接種キャンペーンは有効ではない。
- ②ワクチン接種の有効性や誤解の解消に焦点を合わせ、保健当局への信頼構築を強調したほうがよい。
- ③ワクチン接種を受けた者が身近な他者にワクチン接種を規範として推奨していくほうがよい。
- ④保健当局も医者も、リモートメディアによるキャンペーンだけでなく、職場や店に出向いたほうがよい。
- ⑤ワクチン接種への理解を妨げている誤解は、文化ごとに異なっている点に注意したほうがよい。
- ⑥同じ国内でも、宗教などの社会集団ごとに接種率に大きな違いがみられるため、コミュニティのリーダーがそれぞれの文化に馴染んだ対話などを介して、ワクチン接種をめぐる誤解を解いていく必要がある。

【謝辞】

この研究の一部は、日本学術振興会の科学研究費補助金基盤研究(C) 18K01963の助成を受けて実施しました。

●この件に関する詳細は、下記にご連絡ください。

山口大学人文学部 社会学講座
社会心理学分野 教授 高橋 征仁
TEL：083-933-5243
E-mail：takahasi@yamaguchi-u.ac.jp

発信者 国立大学法人山口大学
総務企画部総務課広報室
〒753-8511 山口市吉田 1677-1
TEL 083-933-5007
FAX 083-933-5013
E-mail sh011@yamaguchi-u.ac.jp